

共立女短家政 ○ 細江 容子 お茶女家政 袖井 孝子 保坂久美子  
 漢陽大家政 徐 炳淑 実践家専家政 鄭 淑子

目的：日本においては、「超高齢化社会」の到来が予測されているが、台湾・韓国においても日本同様、高齢化社会への移行速度は急激である。日・台・韓の3カ国は共に儒教による教えを意識の基礎としながらも、産業化、教育、家族制度、福祉制度などは国ごとに異なっており、それらが青年の意識にも影響を与えているといえる。ここでは、それぞれの国の青年層（ここでは大学生を対象とした）が祖父母との間にどのような情緒的統合を持ち、それがどのような要因によって規定されるのかを3カ国の比較をもとに、明らかにする。

方法：自記式質問法による調査を日本61年6月～7月、台湾 9月～10月、韓国 6月～7月、に実施をした。対象となったのは日本：東京都内および近郊 7大学の学生 567名、台湾：台北 8大学の学生 512名、韓国：ソウル 8大学の学生 511名（有効票のみ）

結果：祖父母との会話、思い出といった情緒的統合は日本、台湾に比べて韓国が低い傾向にある。父方、母方別に祖父母との情緒的統合をとらえた場合、3カ国とも母方祖母との情緒的統合が強く、父方祖父との情緒的統合が弱い傾向にある。

日本においては祖父母に対して持つ思い出は会話の頻度によって規定されており、会話が多いほど良い思い出を持つ傾向にあり、同別居との関連はあまり認められない。しかし韓国においては会話の頻度同様、同別居との関連も父方母方祖父母それぞれにおいて認められた。またさらに韓国においては同別居と会話の頻度との2要因の分散分析での相関も認められた。台湾においては、会話の頻度が祖父母への良い思い出を規定しているが、父方祖父母においてのみ同別居も独自に規定要因となっている。